

アルパック ニュースレター



余呉町交流促進センター「茶わん祭の館」がオープンしました（本文中に関連記事があります）

アルパック ニュースレター もくじ

1998年5月1日

- 「茶わん祭の館」がオープンしました 2
- 多世代型コーポラティブ住宅「花の木坂」に暮らして 3
- 日本のこころ・庶民のおもい 5
- 京滋奈三・広域交流圏シンポジウムを開催しました 7
- 環境共生モデル住宅地を体験 8
- '98年新人紹介 9
- 新刊旧刊書評紹介 11
- まちかど 12

NO. **89**

余呉町交流促進センター 「茶わん祭の館」がオープンしました

松木 一恭

湖北の鏡湖とも呼ばれている余呉湖の以北、上丹生の地で山飾りの装飾に茶わんを用いた茶わん祭が古くから行われています。その茶わん祭の保存伝習や都市との交流を主とした「茶わん祭の館」が今春オープンしました。

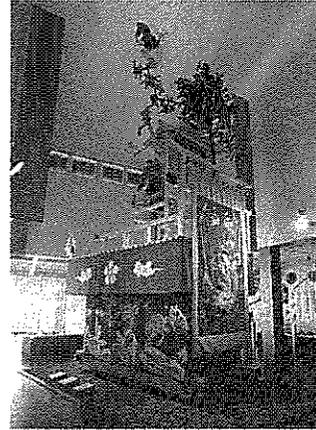
建設地である上丹生の未遠では、昔、良質の陶土が採れ、その陶土で陶器をつくる工人が、神に報恩感謝のために陶器を奉獻したのが茶わん祭のはじまりと言われていました。

祭に使われる山車は、3基（丹宝山、恵宝山、寿宝山）あり、足利時代から伝わる曳幕と江戸時代から残された綴錦の見送りを付け、1ヶ月前から水ごりをとって身心を清めた山づくりたちによって造られます。山車の飾りは、伝記や戦時記などから芸題をとり、伝記物に登場する主人公の人形や花瓶、徳利などを高さ約10mまで積み上げ上手く飾り付け、村人をおどろかせようと、いろいろな箇所得意匠に工夫をこらした秘技として、珍重がられています。その積み上げられた時の華麗さと絶妙なバランスが「湖国の奇祭」とも言われている所以です。飾りの取付方法は、工匠しか知らず、秘伝として口伝されています。

祭ばやしも丹生独特の曳山ばやしや祇園ばやし、新車ばやし、神楽ばやしなどがあり、渡御道中は、足利時代の絵巻を再現したような豪華さをあじわえます。また、古代豊かな舞は、足利文化の舞台をみているようです。

5月3日は、3年ぶりに蘇る春の奇祭

茶わん祭は、元来、北村組、中村組、橋本組が交代で組持ちの山車を曳き、祭を実施していましたが文禄の検地以来次第に衰微し、3組が合同で3年毎に行うようになりました。



まつりゾーン：祭で曳かれる曳山のレプリカなどを展示

近年は、人手不足や財政難から5年から6年に一回しか実施できなくなっています。

茶わん祭の館の完成により、若手が興味をいだき、今後は、毎年行われるようになることを期待しています。また、今年は3基の山車がいっせいに曳かれるので、興味のあるニュースレターの読者の方は、ぜひ、祭をみにきて下さい。

すがた・まつり・くらし

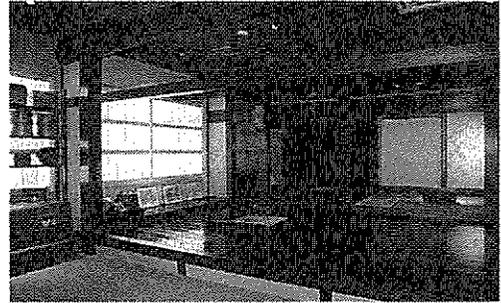
茶わん祭の館は、余呉町の情報収集や地元の人々がこころこめてつくった特産品の販売、地域の方が得する情報を掲載“黑板市場”を展示している「すがたゾーン」、太鼓の実演体験ができるコーナーや祭を広く紹介展示している「まつりゾーン」の他に、丹生ダム建設による水没民家の建材を用いて、余呉型民家と呼ばれる余呉の伝統的な民家を復元し、四季折々、地域の生活に合わせた体験が可能な「くらしゾーン」などがあり、今後のメニュー展開により、幾度も訪れたいくなる施設です。

滋賀県の最北端に位置する余呉町には、落

葉広葉樹の自然林が多く残り、淀川の源流と
 言われている高時川（丹生川）がまちの南北
 を貫流し、その下流に位置する余呉湖畔には、
 天女羽衣伝説の発祥の地があります。また、
 その他に菅原道真公と大変縁深い菅山寺、余
 呉湖を見下ろす賤ヶ岳などたくさんの観光名
 所があるばかりでなく、「ウッディバル・余
 呉」などのレクリエーション施設もあり、飽
 きない楽しいまちです。そして、何よりも明
 るく、親しみやすい人々が多いことがこのま
 ちの魅力です。

茶わん祭の館の設計、建設にあたっては、
 地元出身者や関わりの深い方に情熱をこめて
 携わっていただきました。

設計は、祭保存会や地元住民の方と議論を
 かわしながら進め、外構設計は、おとうさん
 が余呉町出身である弊社京都事務所の西田が



くらしゾーン：
 水没民家の建材を用い復元された「余呉型民家」

担当させていただきました。また、設備設計
 は地元出身者の息子さんに、そしてパンフレ
 ットも地元出身者の娘さんに作成していただ
 くなどなど。

最後に、茶わん祭の館がいろいろな諸状況
 の中で完成したのも余呉町のご担当の方、地
 元の方の熱心な対応でできたもので、あらた
 めて感謝申し上げます。

（京都事務所 まつき かずやす）

多世代型コーポラティブ住宅「花の木坂」に暮らして

大河内 雅司

多世代型の現代版長屋

コーポラティブという縁のもとで、9世帯
 31名が暮らし始めてから5年という月日が過
 ぎていきました。私の暮らすコーポラティブ
 住宅「花の木坂」は、規模は小さいものの
 「多世代型の現代版長屋」という特徴があり
 ます。5年間の暮らしのひとこまをレポート
 します。

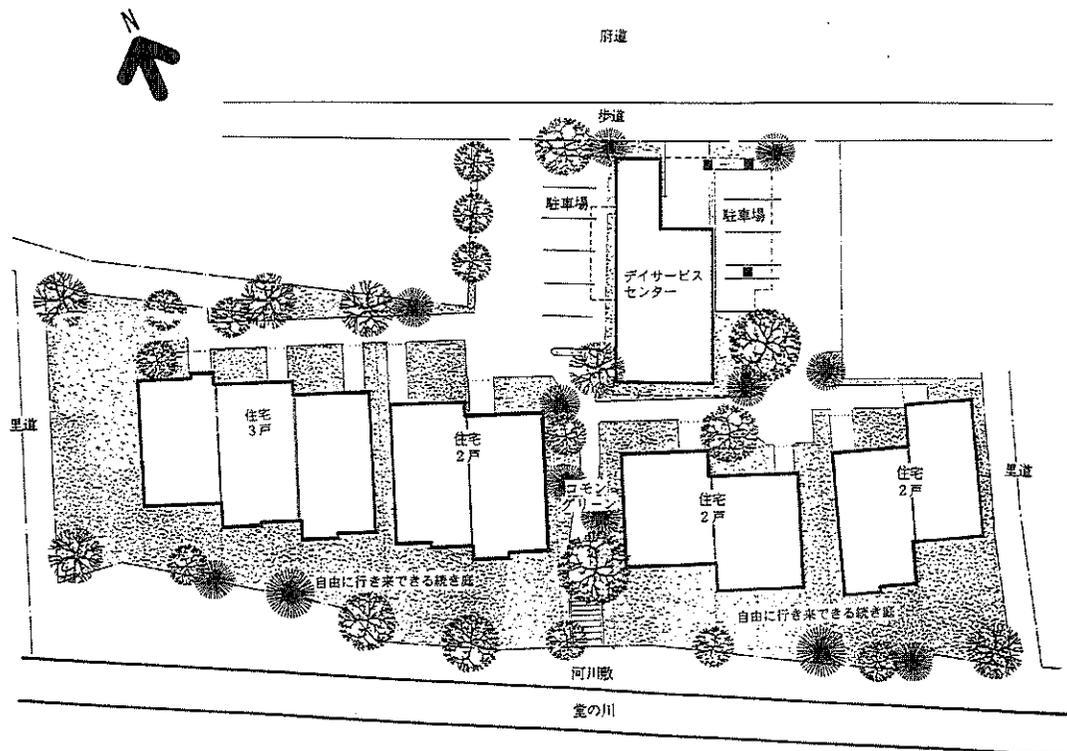


お隣の物干しは子供の鉄棒

9世帯には、まもなく出産予定の0歳から
 83歳まで（平成10年4月現在）、多世代の暮
 らしがあります。計画時に、診療所の併設が
 予定されていたことから、高齢者世帯が3世
 帯入居するなど、多世代型のコミュニティで
 す。住宅は、長屋風で南側の庭は垣根を設け
 ることなく続き庭にして、住人が自由に行き
 来しています。また、環境を守るために建築



一品持ち寄りの宴会



「花の木坂」配置図

協定を結んでいます。

安心感がコーポラティブ住宅の最大の魅力

実際に暮らしてみて実感したのは、「安心感がコーポラティブの最大の魅力」ということです。この方法では、住む前から近所づきあいを育むことができます。幼子を持つ若い世帯や高齢者の世帯にとって、「何かあったときにたよりにできるという安心感」はなににもまして心強いものです。

我が家のお隣は、83歳のお婆ちゃんと59歳の娘さんの世帯です。子供たちはここがお気に入り入りで、お父さんやお母さんにしかられたときに逃げ込んでいきます。子らを預かってもらったり、お隣の方も買い物をしてきたり、お互い様の暮らしをしています。

都会生活は近所づきあいの煩わしさがなく自由ですが、地域で支え合う機会がなくなり出せないために孤立しがちです。子育てや高齢者の介護は、家族だけでは支えきれなくなっており、コミュニティの回復が課題となって

います。

高齢者世帯の転居から

終の棲家として入居されたのに、今年の3月に、高齢者世帯の戸が終身介護付きの老人マンションへ転居されました。「痴呆性の親を介護したことがあってね、迷惑をかけたくないから」と言われたことが印象に残りました。

「花の木坂」の隣に計画されていた診療所は、デイサービスセンターに姿を変えて、地域の高齢者福祉を支え始めました。それでも、公的なサービスが全ての人に行き届き、地域で支えあうことができるまでにはまだまだ道のりは長いようです。

「花の木坂」という家族とともに人生の節目を迎える

ここでの暮らしは5年目を迎えました。この間に一児の誕生を迎え、社会人として2人が巣立ち、新しい終の棲家へと2人が転居されました。また、まもなく生まれてくる子が

いてみんなで心待ちにしています。

我々の暮らしはこれからもいろいろな人生の節目を迎えます。これからは「自立と巣立ち」「人生の幕を迎える」といった段階でしょうか。昔は家族の中に当たり前の

ようにあったそれぞれの人生の節目を、私たちは「花の木坂」という家族の中で迎えることとなります。

(大阪事務所 おおこうち まさし)

きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況

日本のこころ・庶民のおもい 近況ご報告

三輪 泰司

ふるさとのふるさと塾

「21ふるさと京都塾」の塾委員会が、塾運動第一線の現地で開かれました。

3月4日、京北町の府立ゼミナールハウスでの地元京北鉾杉塾の皆さんとの交流会に先立って、現場でみずなのハウス栽培や、木の工場を見たり、聞いたり、触ったり。

こども達の「森の寺小屋塾」から旧村ごとに21山国塾・弓削大杉塾・周山しろやま塾と歴史探訪、緑の少年団、葉草づくりなど、ユニークな塾活動を展開し、南部・精華町の21創精塾等とともに、最も元気旺盛な塾運動のひとつです。京都市内で始めたふれあい朝市は現地へ“来て頂く”ことにして、毎日曜朝8時からウッディー京北前で開かれています。

鉾杉塾の川本塾長は、京都事務所山田所長代理の岳父。府立ゼミナールハウスの理事長さんでもあります。因みに府立ゼミナールハウスは、1976年にアルバックが基本計画から

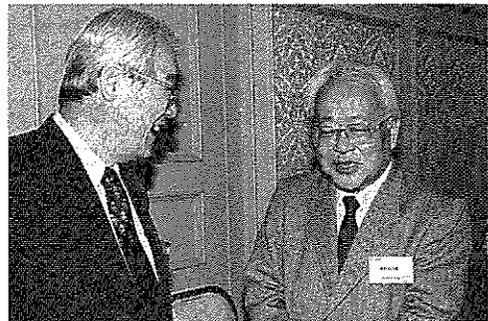
設計監理まで携わった施設。先頃食堂・厨房部が改善整備されました。昨日出来たばかりのように、美しく掃除が行き届いていて感激します。建物は、人々に慈しみ育てて頂いて、「建築」になります。京北町山国は、私の祖先の地でもあります。農山漁村が衰退したら都市も駄目になるのです。懐かしい日本の風景、心の故郷は、そこに人々の豊かな暮らしがあつてこそ。だから一生懸命応援します。イベントで元気に！

3月18日、東京で「イベント学会」の設立総会が行われ、発起人の末席に連なっておりましたので参加しました。初代会長には木村尚三郎先生が就任されました。

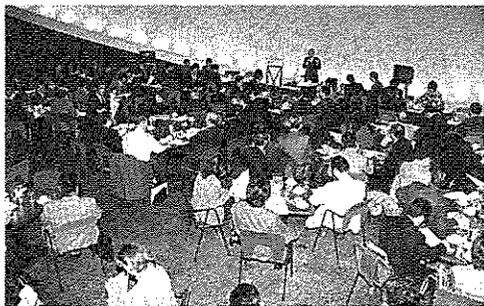
長野オリンピック・パラリンピックで、ボランティアのめざましい活躍が知られました。今までイベントの“受け手＝客体”としか見られていなかった民衆が、積極的に“主体”に加わっています。“祭事は祭事、渡りは渡り”と応仁の乱で中断した祇園会の山鉾巡行を復興したのは、京町衆でした。1986年に仲間と書いた「緑の都市学」で、国家統制と祭式・祭礼、見物衆の発生と商業主義等、お祭



3月4日：
第16回 21ふるさと京都塾委員会



3月18日：
イベント学会設立総会 木村尚三郎会長と



3月23日：日本イベント産業振興協会
イベントセミナー（京都駅ビルChaya-Dos）

の原理解明を試みました。ボランティアの視点からのイベント研究を期待します。

23日、日本イベント産業振興協会が、京都駅ビルを舞台に、イベント・セミナーを開催しました。望月照彦先生とご一緒に講師を承り、少々そのような問題を提起しました。

シアター1200のレストラン Chaya-Dosが会場でした。こんな使い方もあるのかと感心しました。

京都駅ビルは、3月13日に京都中小企業家同友会女性部会で、4月4日には日本建築家協会（JIA）で、解説する機会がありました。

JIAの集まりは、設計者・原広司氏の講演を催し、司会をつとめました。これはまさに都市化され建築です。都市が個々の建物の絶え間ない更新で変わっていくように、京都駅ビルが人々の声を聞いて改善整備を加え“都市建築”へと、育てて頂きますよう念じます。

こころー夢は未来の予行演習2020

3月27日、みやこメッセで「第18回京都デザイン会議」を開きました。

建設省建築研究所第一研究部の古瀬敏部長に「バリアフリーの時代」を提起して頂いてこころと表現・こころと形・こころと環境・こころとコミュニケーションの4分科会で議論しました。

近未来、2020年を目指して、一人ひとりが

歩んできた人生の経験や能力を積極的に生かし、豊かで明るい高齢社会を描いてみるとどうだろう。それには心のバリアーを無くすことではないか。心豊かな生活の安全・安心へデザイナーは何をしたらよいか考えよう、というわけです。

11のデザイン団体に集まる3000のデザイナー、クリエイターがジャンルを越えて話し合い、触発し合い、理解と協同の輪を拡げているのは、京都ならではと自慢しています。

各団体のリーダーがぐんと若返り、団体運営など、地についた交流が進んできたのは今年の特徴でした。この一年に受賞した若い服飾デザイナー達が、自作のファッションのモデルをつとめて披露し、パーティもひときわ和やかに、華やいで盛り上がりました。

4月22日には、デザイン系大学の学生達による、自由な討論会を計画しています。

けいはんなプラザ5周年

4月17日、株式会社けいはんなの設立5周年を記念して、京阪奈3学長21世紀を語る講演と鼎談シンポジウム「人間・科学・社会」が開かれました。奥田・岡本・沢田3元総長も、そろってお越しでした。

今年は、関西学術研究都市調査懇談会ー奥田懇が、第一次提言を発表して、ちょうど20年になります。関西学研都市の理念は、いまでも新鮮です。

学研都市10年ー奥田先生と語ると題して、創草の時期から、理念構築・事業推進への記録の一端としよう、このニュースレターに4回シリーズを書いて既に10年。

その中で都市づくりは、50年・100年かかるものと言っていました。20年はまだ初期の内です。それにしても、人の命は短いもの。河野卓男氏はじめ、学研都市にご貢献頂いた方々の多くと、既に幽冥境を異にしました。

講演で岸本忠三・大阪大学総長が「知識は積み重ねることができるが、知恵は伝えることができない」と言われました。だから古来書物として伝えられている知恵の本質を巡って、様々な議論が闘わされ、解釈が行われてきました。それでも書物や記録は大切で、それを学ぶことは人間の永遠の使命です。

「正史」には残らないかも知れませんが、この6月で、奥田懇談会の提言から軌道に乗るまで、事務局をお願いした財団法人都市調査会が破綻して15年になります。もし都市調査会がなかったら、もし断られていたら、奥田懇の運営はスムーズにいかず、関西学研都市構想の推進は遅れたでしょう。難しいことを引き受けて頂いた、故藤野専務理事と米田常務理事のご尽力に、改めて感謝致します。

1996年12月、基本的に非常勤の「取締役会長」になって1年余が経ちました。足腰の達者な内に、30余年の埋め合わせに家庭奉仕も兼ねて旅行などと企んでいましたが、ヒマになったと違うかと、審議会・委員会、学会・団体、講演や執筆と、却って忙しくなってしまうました。そして無駄かも知れませんが、「知恵を伝える」仕事を続けております。

アルバックを気に掛けて頂いている皆様へ、近況ご報告を兼ねて、お礼申し上げます。

(取締役会長 みわ ひろし)



京滋奈三・広域交流圏シンポジウム
：パネルディスカッション

京滋奈三・広域交流圏シンポジウムを 開催しました

山口 繁雄

去る2月20日、京都商工会議所講堂に於いて、京滋奈三（京都、滋賀、奈良、三重）地域を対象とした、『日本の文化創造拠点づくりをめざして』—京滋奈三地域の役割を考える—と題するシンポジウムを開催しました。

主催したのは関係4府県と京都市及び関係経済団体（商工会議所及び経済同友会）からなる「京滋奈三・広域交流圏研究会」です。アルバックは、その事務局の一員を務めています。同研究会は、2年程前から京滋奈三・広域交流圏の形成に向けて、研究活動を続けてきていますが、今回のシンポジウムは、聞き慣れない「京滋奈三」地域の言わばお披露目の意味を込めたものでした。また、国において進められている「新しい全国総合開発計画」に、当地域の取組を認知してもらいたいという願いも込めたものでした。

お蔭さまで、当日は400人近くの方々にお集まり頂き、会場に立ち見が出る程の大盛況で、有意義なシンポジウムを開催することができました。

シンポジウムでは、国土庁の齋藤審議官にも駆けつけて頂き、あいさつを兼ねて新しい全国総合開発計画の策定状況とその概要について説明して頂きました。基調講演は、慶応大学大学院教授で国土審議会の計画部会長を務めておられる伊藤滋先生にお願いし、「21世紀の私たちの生活と国土の姿」というタイトルで国土計画にまつわる各種の議論を分かりやすく解説して頂きました。

伊藤先生のお話で印象深かったのは、これまでの全国総合開発計画のテーマは「産業振興」を基調としてきたが、今回の計画はいよ

いよ「文化」になったということでした。

後半のパネルディスカッションでは、この「文化」をめぐる議論を中心に行って頂きました。コーディネーターは、染織作家の森口邦彦さん、パネリストは服飾研究家の市田ひろみさん、作家の高城修三さん、(株)ヒューマンルネッサンス研究所の成田重行さん、日本福祉大学教授の丸山優さんの計5人でした。

この討論会の中でも議論されましたが、京滋奈三地域というのは、現在は近畿圏の内陸部にあつて、府県境があるために一体感を持ちにくい地域になっていますが、歴史を振り返ってみると、実は大変につながりの強い地域で、しかも我が国の歴史の中で大きな役割を果たしてきました。

私共の研究会でも、このことは当初より認識していました。特に、パラダイムの転換期を迎え、次の時代を模索しなければならなくなったという時代背景の中で、この地域の持つポテンシャルが何がしかの役割を果たしていけるのではないかと考えてきました。

その役割というのは、誤解を恐れずにいうと、「東西文明の融合による新しい文化の創造」ということでした。シンポジウムのテーマを『日本の文化創造拠点づくりをめざして』とした所以です。

京滋奈三地域は、東洋の文化・文明をベースに発達した我が国固有の文化や経済等を豊富に蓄積しています。明治期以降の西欧型近代化で失われてきたものがたくさん残っており、それが今後の産業経済や生活文化の創造的発展に役にたつ、そういう時代になってきたのではないかと考えています。今回のシンポジウムは、そうした思いを強めさせてくれるものでした。

(京都事務所 やまぐち しげお)

環境共生モデル住宅地を体験

-大阪府営河内長野木戸住宅の視察より-
岡本 壮平

先日、「環境と共生する街」としてデビューした大阪府営河内長野木戸住宅（河内長野市）を見学した。これは、「環境と共生する中高層集合住宅地」コンペの特選作品を元に、環境共生住宅市街地モデル事業の適用を受けて事業化された団地の建て替え事業である。

環境共生要素技術を体感

当団地は、コンペ方式によるモデル事業という経緯もあつて、現時点で導入の可能性の高い要素・技術がふんだんに導入されている。見学会では「ワクワク」するものから「……？」なものまで一通り体感できた。例えば…

<ワクワクするもの>

○風力発電：1住棟の屋上屋根に2台のプロペラが回る。能力は500w/hだが、実効は3～5割。環境共生の象徴的存在。

○マウンド建築：集会所の屋根半分を土と雑草で覆っている。断熱効果や冷房負荷の低減。

○地中冷熱利用：集会所にクールチューブを設置。夏季は外気より約6℃低い送風が可能。

<……？なもの>

○屋根上緑化：屋上に土を載せるのではなく、屋上に大きな植木鉢を並べて庭園化している。管理不十分で枯れていた。

○ビオトープ：駐車場の真ん中に小さな池があるのだが…。周辺の農地やため池と結びポイントとしてなら理解できるかな？

○風の道システム：住棟の中の吹き抜けに上昇気流が生じて、住戸と住棟の通気性が高まることを期待している。

環境に優しい人々が暮らすまち

木戸住宅は環境共生のモデル住宅地であり、要素・技術が総合的に導入されている。住民



駐車場の中心にあるピオトープ

雨水利用システムで蓄えた水をポンプでくみ上げる
子供の遊び場

は日常の様々な場面で「環境と暮らし」を意識することになるし、そこで育つ子供たちは“当たり前”に環境共生を体験する。

環境共生住宅地とは、「環境に優しい住宅がある場所」ではなく、「環境に優しい人々が暮らすまち」なのではないか。モデル住宅地に“モデル住民”が育つように期待するものである。

(大阪事務所 おかもと そうへい)

’ 98年新人紹介

モ	ザ	イ	ク	の	町
大阪事務所			林	孝昌	

ロスアンゼルスにある“House of Blues”という名のライブハウスの経営者でもあるダン・エイクロイドという名の俳優が“Unity in Diversity”（「多様性の中での調和」といった感じですが、最近流行の言葉に直すと「共生」に近いかもしれません）というスローガンを掲げているのを知って非常に感心したことがあります。別に音楽に限ったことではなく、その他の芸術や教育、そして町づくりにおいても、日本のこれからの重要なキーワードになるのではないかと思います。

日本人は昔から箱庭や曼陀羅絵図のように、小さな空間に全てを含有する小宇宙を作り出

すことが大好きですし、紅白歌合戦のように「家族そろって楽しめる」という美名の下に、若者は辛気くさい演歌にあくびをし、お年寄りはロック歌手のキンキン声に眉をひそめて我慢しながら北島三郎の出番を待つ、といった馬鹿げたシステムを50年以上も続けてきたのですが、それでは「共生」とは言えません。町づくりの場合も同じことで、「お年寄りとお年寄りが手に手をとって仲良く暮らせる町」とか「歴史・文化遺産を守りつつ、発展的な未来に向けて創造的に羽ばたく町」といったような分裂症的なスローガンは「共生」にはほど遠いものだと思うのです。

プランナーとしてアルパックに入社した私が夢に見るのは、「環境に優しい町」とか「お年寄りに優しい町」、更には「ファッションの町」「音楽の町」といった明快なテーマと具体的な方策を持った町同士が、モザイクのように絡み合せて、調和のある一つの都市を作り出す事です。日本でも、都市化の進展やインフラの充実などによって社会の流動性が極めて高くなってきたため、夢物語ではなくてきたように思います。入社して約10ヶ月、日々の業務に追われ目先のことにとらわれがちですが、“Unity in Diversity”というテーマは、これからも胸に秘めておきます。

(はやし たかまさ)

まちづくりとストーンズ
大阪事務所 山本 昌彰

昨年12月からお世話になっていましたが、このたび3月より正式にアルバックの一員となりました山本です。どうぞよろしくお願ひします。では、まず、私のプロフィールから。

名前：山本 昌彰
生年月日：昭和38年10月3日
出身：京都大学工学部交通土木
出身地：名古屋
趣味：音楽（ストーンズ・フリーク（？））

加藤和彦の「ストーンズを嫌いなやつは信じない。世界中の誰だって…」という言葉に惹かれ、ストーンズの深みにはまりました。

さて、我々の手掛ける『まちづくり』とストーンズを比較したとき、驚くほど共通点の多いことに気がつきます。両者にあるもの又は、必要なもの、それは、①情熱、②観客、③協調、④演出、そして⑤一貫性です。（なによりあの泥臭さも共通しているではありませんか。）

①は言うまでもなく必要なものであり、②は、『まちづくり』では、住民や地権者が該当します。すなわち、常に、住民等の為に行う。したがって、まず、住民等を理解することから始まり、最後には、その住民等の評価を受けることとなります。また③のように他の多岐にわたる専門家とのチームワークも必要で、ときにはそのコーディネイト役、ときには地元等とのパイプ役といった④演出が必要となります。そして、⑤で、留意していただきたい点は、一貫性とは固執することではないということです。ストーンズも、1963年

（私の生まれた年である）のバンド結成以来34年間、終始一貫した路線を歩みながらも、時代とともに常に新しいものを求め、変貌してきているのです。『まちづくり』でもそれは同じでしょう。事業が非常に長い期間にわたることから、カタチが変わることはいたしかたありません。そのカタチよりも、地元、地域あるいは行政のコンセンサスを得た『理念』（一貫したものが望ましいが変化しうるもの）が重要で、そのもとで、いろいろな人（住民等）の声又は時流により、カタチはむしろ変わっていくものなのでしょう。このように『まちづくり』はストーンズそのものであり、地元説明会等はコンサート、そしてそこに携わる我々はパフォーマーなのです。

さあ、あなたも、勇気をもって、パソコンのキーボードをギターに、マウスをマイクにもちかえて、ストーンズを聴き、シャウトアンドダンスしませんか。（私と一緒に）

（やまもと まさあき）



林 孝昌



山本 昌彰

編集局より

○新年度を迎え、読者の皆様の住所などの変更がございましたら、同封の宛先確認ハガキにて編集局までご一報をお願いいたします。

また、ハガキには「アルバックニュースレター」の感想欄を設けています。皆さんの忌憚のないご意見をお願いいたします。

担当：大阪事務所 中村 孝子

新刊旧刊書評紹介

松坂 洋 著
みずみず

日本図書刊行会 / 近代文芸社

瑞々しく生きたい 一故郷と子らへの想い一

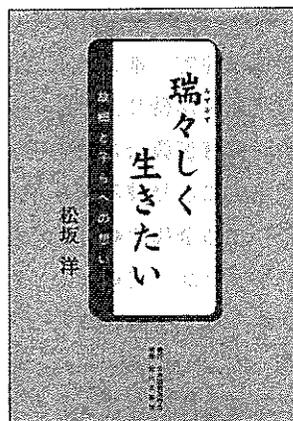
紹介 高坂 憲治

「彼」は36年余りにわたり、兵庫県但馬の小さな山間のM町で地方公務員としてまちづくりに情熱を傾けてきました。この本はそうした「彼」の公務員としてのまちづくりへの取り組みを縦系に、晴天の霹靂とでもいうべき息子の登校拒否に対峙する「彼」等親子の歩みを横系に構成されています。

「彼」はこの雪深い山間の町に生まれ、やがて高校卒業を前にして故郷を捨てる覚悟で、家出同然東京行き夜行列車に乗ります。

「彼」は、自分の力で自分の道を切り拓きたい願望を満たすには家出をするしかないと考えたと述懐します。この最初の家出は1週間で故郷に戻ることになるのですが、山深い故郷にあって何をやる気力も起こらず、人に会うこともせず、毎日牛を追って自然の中に身を置く日々を過ごします。その後も家出を企て、また神戸で職に就くのですが、やがて故郷の役場職員として採用され故郷に戻ります。以来36年余り、「彼」の公務員生活は決して平穩無事であったわけでもなく、さまざまな流れに翻弄され苦戦を強いられながらも、過疎の町の活性化、まちづくりに取り組んでいく様子が語られています。「彼」の取り組みはやがて地域連携や地域間交流へと向かっていきます。

「彼」が突然息子の登校拒否と向かい合うのは息子が小学校3年生の冬でした。この日から足掛け10年、息子が中学校を卒業するまで、「彼」と彼の妻は手探りの中で、時には学校に憤懣やるかたない思いをぶついたりしながらも、子供と向かい合っています。それは、



「彼等親子共々ひっそりと出口の見えない迷路をさまようような有様であった」。試行錯誤の連続、一進一退の日々。キャッチボール、朝の散歩やドライブ、学校への送り迎え、全校生徒との握手戦術やジャンケン戦術。

「彼」は学校で、町の良さや町が目標、まちづくりの話子供達に語ります。そして友達について。「地域の魅力を魅力として受け入れ、その魅力を地域ぐるみで支えながら外に向かって発信できるように」

この本では、「どうしようもない」といわれた地域を前に、キラキラした眼で突き進む「彼」と、困惑しながら息子や家庭と向かい合う「彼」が同時に存在し、やがて地域や子供達、そしてまちづくりを同じ次元で見つめている「彼」を通して地域と教育のあり方を問いかけています。

「彼」は昨年助役を退きました。それでも「彼」は会う度にいます。「地域のことが気になって仕方がないんです。」

この本は書店で注文して購入できます。

(大阪事務所 こうさか けんじ)

まちかど

アートなコミュニティ空間 ～南芦屋浜団地の試み～ 坂井 信行

南芦屋浜団地は住宅・都市整備公団が整備し、兵庫県と芦屋市が借り上げる814戸の公営住宅団地です。災害復興公営住宅であるため、入居者は仮設住宅に住む被災者が中心で、また高齢者も多いため全体の約25%の住戸がシルバーハウジングとなっています。

南芦屋浜団地では入居前のコミュニティ形成と、入居後のコミュニティを育むためのしくみづくりが重視され「コミュニティ&アート計画」と名付けられたユニークな二つの試みが行われています。

一つは入居予定者などの参加により、共同空間の利用や維持管理などについてのしくみをつくっていく「暮らしのワークショップ」です。ワークショップでは例えば「こんな暮らしだったらいいね!」をテーマとした紙芝居をつくったり、エレベーターホール周辺の使い方をテーマにした演劇をみんなで演じるなど、これから始まる共同生活について楽しみながら学んでいく中でコミュニケーションを図っていくものです。

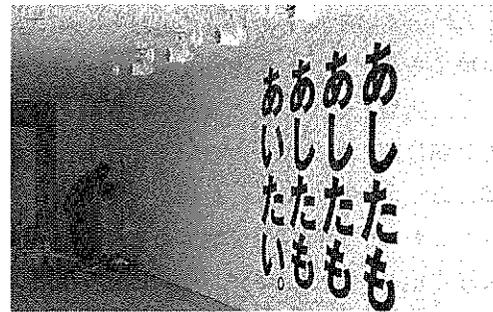
もう一つはアートを通して居住者が自分たちのまちに愛着をもてる環境をつくっていく「アートワーク計画」です。住棟エントランスのピロティや外部のCOMMONスペースに芸術

家や市民、ボランティアによってつくられたアートが設置されました。これらのアートをきっかけに新たな出会いや会話が生まれたり、居住者自らが手を入れることで環境創造に触れることなどをねらいとしています。

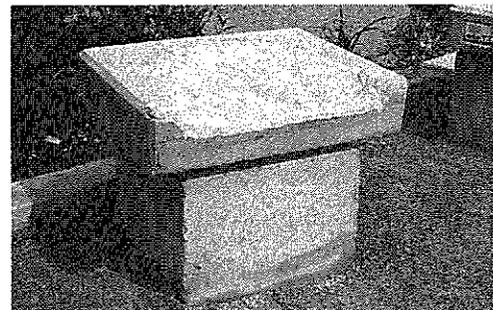
入居者にしてみれば少々押しつけがましいコミュニティかもしれませんが、集合住宅での共同生活は、居住者間のコミュニケーションなしにうまくいかないことは過去の多くの例が示す通りです。

南芦屋浜団地におけるこれらの試みは、災害復興公営住宅という特殊性を超えて、これからの集合住宅におけるコミュニティづくりの一方向を示しているのではないのでしょうか。

(大阪事務所 さかい のぶゆき)



言葉の持つイメージが見る人をハッとさせる：
ピロティのアートワーク



市民の身体が「記録」された「お尻合いベンチ」：
COMMONスペースのアートワーク

アルパック (株)地域計画建築研究所

- 本社 〒600-8007京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町82・大和銀行京都ビル6F/TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764
- 大阪事務所 〒540-0001大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F/TEL(06)942-5732 FAX(06)941-7478
- 名古屋事務所 〒460-0008名古屋市中区栄3-18-1・ナディアパークビジネスセンタービル13F/TEL(052)265-2401 FAX(052)249-3925
- 東京事務所 〒160-0022東京都新宿区新宿2-5-16・霞ビル401/TEL(03)3226-9130 FAX(03)3226-9560
- 九州事務所 (株)九州地域計画研究所 〒810-0001福岡市中央区天神1-15-35・ホンダハビエ5F/TEL(092)731-7671 FAX(092)731-7673